
ガンダムSEED 交わった世界

カルラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンダムSEED 交わった世界

【Nコード】

N7696Y

【作者名】

カルラ

【あらすじ】

C・E・71 L3コロニー『ヘリオポリス』にて地球軍による新たなプロジェクト、その名も『G』計画。新型MS・5機と新型戦艦を開発されていた。だが、ある組織にこの情報は漏れていた。コーディネイターとナチュラル、2つの人類。悲しい歴史は終わりを告げない。

今此処に新たな物語、少年達をも巻き込む戦争が始まろうとしている。

この作品はガンダムW×ガンダムSEEDのクロス小説です。

なお、ガンダムのパイロット五人組は16歳設定です。

プロローグ（前書き）

物語の序章です。

初めてですが、頑張ります（o<>o）

プロローグ

ある一機のシャトルの中

??「なあ、本当にあの情報はあつてるんだろうな？」

××「……」

??「無視するな!!」

長いおさげ髪を揺らしながら黒い服を着た少年が言う。

××「…、うるさい。聞こえている…」

凍てつく瞳の少年が反論する。

??「本当に、L3コロニーでMS開発が行われているのかよ？」

××「ああ、間違いない。この小火は早急に消し去るぞ、デュオ」

??「分かつてる、ヒイロ」

デュオ「あの悲しい歴史は繰り返したくねえもんなあ…」

プロローグ（後書き）

さて、今後どうなるやら…

キャラクター設定 ↳ガンダムW↳（前書き）

ガンダムWメンバーの設定ですっ！！

キャラクター設定 ーガンダムWー

ヒイロ・ユイ

年齢：16歳

所属：ブリベントー『エンジェル』

搭乗機体：ウイングガンダムゼロカスタム

デュオ・マックスウエル

年齢：16歳

所属：ブリベントー『デス』

搭乗機体：ガンダムデスサイズヘルカスタム

EW版が終わった直後の設定。

（にもかかわらず、ガンダムは自爆していない）
カトル辺りが『宇宙の心がっっっ』等と言って自爆を反対したと
いうことにしてください。

無論、リリーナにぞっこんなヒー君です！！

他のメンバーは登場後に載せます

キャラクター設定 〱ガンダムW〱（後書き）

マリーメイアの反乱 〔12月27日〕

『ヘリオポリス』奇襲 〔1月25日〕

いわゆる『ス ボ』みたいな世界観です…（笑）

第1話 平和な時間（前書き）

ついに主人公の1人登場っ！！

第1話 平和な時間

「3コロニー『ヘリオポリス』内

まだ、幼さの残る茶髪の日本人系の少年の肩に小型ペットロボットが舞い降りる。

「トリイ」

少年 キラ・ヤマトは『トリイ』をくれた少年を思い出す。

「アスラン……」

緑色の瞳、年齢よりも大人びた口調。

キラもそのうちプラントに来るんだろ？

「おーい、キラ」

少年の声が聞こえる。

キラはその少年の名前を呼ぶ。

「トール、それにミリイも……」

トール・ケーニヒとその恋人ミリアリア・ハウ。同じゼミの仲間だ。

「どうしたの？」

「『どうしたの？』じゃねえよ！！カトウ教授がお前を探してたぞ」

「きつと追加の課題ね」

ミリアリアがウィンクしながら言った。

「うえエー まだ、渡された課題、終わってないのに…… あの鬼教授」

「楽しい会話中だけどちょっといいかい？」

「……えっ！？……」

聞いたことのない声だった。

そちらを向くと、少年が2人。

1人は長いおさげ髪に黒い服を着ている。そしてもう1人は凍てつく瞳に緑色のタンクトップとジーパンを着ていた。黒い服の少年が言う。

「お前ら、ここのゼミの学生か？」

「そうですけど……」

「ふーん、じゃあカトウ教授がどこに居るか知ってるか？」

これも黒い服の少年だ。

もう1人の少年は静かに会話を聞いている。

「教授なら、『モルゲンレーテ』の方に居ると思いますけど……、何か用ですか？」

「いや、ありがとな！」

そこで彼らは踵を返し歩き出した。

「何者だ？あいつら……見たことない顔だけど」

「ほかのコロニーの学生かしら？」

「やっぱり、黒だったな、このコロニー」

「ああ、念のためモルゲンレーテの方も調べておくぞ……」

「OK」

第2話 偽りの平和（前書き）

少々、長くなりました……

第2話 偽りの平和

ゼミの一室

ガチャッ (ドアを開ける音)

「あつ、やっと来た…」

「全く、今まで何してたんだ？」

前者はカズイ・バスカーク。後者はサイ・アーガイル。2人ともトールと同じゼミの仲間だ。

「ごめん、遅れた…」

「あれ？教授は？」

「なんか用事が出来たからどっか行つた。それと、はい」
カズイが何かを差し出す。
それは

「はあー、まだ終わってないのに、追加が…」

「頑張れ、キラ」

トールが肩をたたく。

ふと視線を感じそちらを向くと、少年が居た。

「彼は？」

「ああ、教授のお客さん」

「教授の？……、あつ、そういえばこっちに少年が2人来なかったか？」

「え？……来てないけど」

トールの質問にサイが答え、カズイも首をふる。

「まじ？じゃああいつら、何だったんだ？」

その瞬間

ダフオオオオンッ

「なっ、何だ!?!」

「爆発!?!」

「隕石かつ!?!」

その時、ゼミの大人が言った。

「ザフトに攻撃されている」

「コロニーにモビルスーツ（MS）が入って来てるんだよつ!?!」

それを聞いた瞬間、教授のお客さんである少年が急に動き出した。

「あつ、君」

少年は銃声の聞こえる方に向かって行く。

あわてて、彼の腕を掴む。

細い腕だった。

「っ!?! 離せッ!?!」

「何言ってるの? それよりも早く避難しないとっ」

急に爆風が吹いた

それにより帽子が飛ぶ。

「お…………おんなの…………子?」

「何だと思っていたんだ? 今まで…………」

少年 いや、少女が言った。

「いや…………その…………」

「お前は早く避難しろ!!」

「えっ…………、君は？」

「私には確めなければならぬことがある」

そう言うときまた銃声の聞こえる方に向かおうとする。

後ろを向くと、来た道は瓦礫で戻ることなどできない。

「そんなことよりも避難しないとっ!!」

「あっ!!お…おいつ!!」

僕は彼女の腕を引き、シエルターを探す。

急にか細い声が後ろから聞こえた。

「こんなことになってはと、私は、私は…………」

暗い通路の先に光が見えた。

僕はそれを目指して走る。

光が眩しくて立ち止まった瞬間ッ

ダダダダダダダッ

そこは、戦場だった。

銃声と銃声が響きあい、次第に音が大きくなる。

聴覚がおかしくなるぐらいに……………

すると、彼女は何かを見つけその場に座り込む。

「地球軍の新型機動兵器……………、お父様の……………」

[illegible]

チャッ！！！！

彼女の声を聞き、何者かが銃を向ける。

「……子ども？」

此処に居たら、撃たれる。

僕はとっさに思った。

早く此処から離れないと。

「泣いてちゃダメだよっ！！ほら、走って！！」

僕たちは再び走る。

角を曲がると、シェルターが見えた。

「ほら、此処に避難してる人がいるよ」

よっぽど、さっきのことが衝撃的だったのだろう…

さっきからずっと黙ってる。

スピーカーから声がする。

「まだ、誰か居るのか!？」

「はい！僕と友達もお願いします！！開けてください」

「2人！？もう此処は一杯なんだっ！！」

「左ブロックに37シエルターがあるがそこまで行けんか!？」

そちらの方を見る限り、簡単には行けそうもない……

「なら１人だけでもっ！お願いします！！女の子なんです！！」

「わかつた…すまん」

同時にドアが開く。

「入って……」

だが、彼女は無言だ。

僕は無理やり彼女を押し込む。

「何を！？私はッ」

「いいから入れ！僕は向こうに行く。大丈夫だから！早く入って！」

「！」

「待てッ！！お前ッ」

そのままドアを閉め、走り出す。

さっきの銃を向けた女性がまだそこにいた。

そして、その女性を狙う一つの銃口

「危ないッ！！後ろ！！！」

「！！！」

ダキユンッ

「……………さっきの子？なんで！！？」

女性が叫ぶ。

「来いッ！！！」

「左ブロックのシェルターに行きます。お構い無く」
だが、彼女の言葉は衝撃的だった。

「あそこはもうドアしかないッ！！！」

「えっ……………」

「こっちへッ！！！」

僕は意志を決め、2階から1階に飛び降りた。

ダダダダダダダッ

「っあー!!」

「ラストイツ!!くっ!!」

ダキユンッダキユンッ!!

「うぐっ……」

「ハナマッ!!」

仲間が撃たれたのだろっ、彼女が赤のザフトパイロットに射撃する。
ザフト兵も撃ち返す。

「あああッ」

女性是被弾した。

ザフト兵の銃は弾詰まりしたのだろっ。

銃を捨て、ナイフを持ち変えた。

僕はとっさに彼女の前に出る。

ザフト兵のバイザー越しに相手の顔が見えた……

「アス……、ラン？」

「キ……キラ!?」

第2話 偽りの平和（後書き）

誤字、脱字やアドバイス等お待ちしています!!

第3話 天使と死神（前書き）

ちよつとオリジナルを加えてみました

第3話 天使と死神

同時刻

『ヘリオポリス』モルゲンレーテ付近

「ザフトのMSだっ！？」

「『ここ』は中立の筈だぞ！？」

避難する人々の波に逆らう人影が2つ……。

「おい、ヒイロ。相棒たちを連れて来て、正解だったな……」

「ああ……」

「にしても、『ザフト』さんも派手なやり方するなあ……」

「無駄口をたたく隙があるなら足を動かせ……」

「ヘイヘイ……」

彼らが向かう先、そこは

「もう一度一緒に暴れようぜ、相棒う」

「……………」

工場の中でひっそりと立っている鋼鉄の巨人
らを待っていた。

ガンダムが彼

手慣れた手つきで起動させる

「どうする？ヒイロ。敵を全滅させるか？」

「いや、武装解除させる……」

「りょーかいッ！！さゝて、死神が戦場に舞い戻って来たぜえ！！」

「！」

「敵MSは……3つて、結構少ないなあ」

「おそらく、別部隊がいるんだろう……」

「ってことは、あいつらも『アレ』が狙いか……」

こちらの存在に気付いたのだろう、敵MS ジン三機がこちらを向く。

バーニアを吹かし、突進してくる。

ヒイロが乗るウィングガンダムゼロは、素早く舞い上がる。

デュオが乗るガンダムデスサイズヘルカスタムは、ハイパージャマ―を起動させる。二機の突然な動きにジン三機は立ち止まる。その内の一機に忍び寄る、不穏な影……

死神 ガンダムデスサイズヘルカスタムが大鎌

いや、ビームサイズを振り下ろしジンの頭部と右腕を引きちぎる。

「いつ……いつの間に!？」

「チッ!お前は一端離脱しろ!！」

「クッ!すまない……」

しかし、一羽の天使が別の機目掛けて急降下する。

そして、そのままビームサーベルで両足を分離させる。

その姿はまさに『告別天使』であった。

「はっ……速い!？」

「ナチュラルごときが……、離脱するっ」

その時

ダフオオオオオンッ

「ッ……………!?!」

「なっ、なんだ!?!あ……………あれは!?!」

彼らが見たもの、それは

「奪取されたか……………」

「しくったぜッ……………」

額にV字アンテナを持つ鋼鉄の巨人
起動していた。

ガンダムが三機、

「流石ザフト、お手が早い……………、情報を当てにすると、後二機残
っているはずだっけ?」

「ああ……………」

三機はこちらに目もくれずコロニーから脱出していく。

が、次の瞬間、残りの二機も立ち上がる。

だが、片方の機体の動きはぎこちない……………」

「……………」、まさかあの機体」

最後の一機のジンがぎこちない動きの機体に攻めこむ。

仲間から知らされたのだろう……………」

乗っているパイロットが

ナチュラルであると……………」

機体のパイロットも己の危機に気付いたのだろう、向きを変えた瞬間
灰色だった機体に鮮やかな色が浮き出る。

「あれが例の『フェイズシフト』ね……………」

別の機体は離脱する。

だが強度の高い機体でも、同じ場所を攻められては、長くは持つまい……………」

ジンがこれで決めると動きを止めた瞬間、機体
さつきまでとは別人の動きでジンに体当たりする。
バルカンを用いて敵との距離を作る。

「まさか、あのパイロット、調整してるのか!？」

おそらく、そのまさかだろう……

「ありえねえ……」

「確かにナチュラルでは無理だろうな……」

「ってことは、ヒイロ」

「ああ」

ガンダムはナイフのような武器を取り出し、ジンのコックピット付近に攻撃する。

ジンのパイロットは機体を捨てて、脱出した。

「あの機体どうする? ヒイロ」

「……………、あのパイロットに接触する」

「そうこなくちな!!」

第3話 天使と死神（後書き）

感想お待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7696y/>

ガンダムSEED 変わった世界

2011年11月27日18時50分発行